

# 日本人とアメリカ人の挨拶行動

## ——出会いの挨拶——

小林 祐子

### I はじめに

一般に外国語の会話学習の第一歩は挨拶練習で始まる。それはどの社会においても適切な挨拶交換なくして、社会的接触をはかることは不可能であり、挨拶が対話の重要な構成要素をなしているからである。とはいえ挨拶がまともな考察の対象とされ、その用法に記述が与えられたことはこれまでにほとんどない。従ってこれを教える場合自国の言語のなかに類似の挨拶表現を見つけ、これと便宜的に結びつけて、その用法を学習者に類推させるという方法がしばしばとられている。かくして“good morning”とは「お早よう」のことなりという把握の仕方が一般的となっている。だが“good morning”は本当に「お早よう」なのだろうか。この素朴な疑問が今回の挨拶行動の比較のきっかけとなっている。

二つの異なった社会間で特定の挨拶表現が等価をもつか否かは、それぞれの社会の挨拶行動に対する構造的把握なしにきめられるものではない。この観点にたつて、アメリカ人の挨拶行動の実態を日本人との比較で捉え、社会言語学的考察を加えるのが本稿の主たるねらいである。挨拶行動は相手や場面とに応じて行なわれる社会関係調整行動の一種であり、その意味で多分に「待遇（敬語）行動」と重なる部分がある。対面するもの同士が相互の社会的・心理的距離に応じて、挨拶を避けたり、或いは丁重な挨拶を交換している。その選択行動には、人間関係を律する社会の基本原理の働きがあり、この部分を視点に含めない分析は、単なる挨拶表現の平板な記述に終りやすい。従って、挨拶行動の展開する物理的・時間的要系と同時に、対面する当事者間の心理的・社会的関係がどのように作用しあって具体的な挨拶表現として表われるかに目をむけていきたい。

### II 挨拶行動の定義

日本人とアメリカ人の挨拶行動様式を具体的に論じるまえに、「挨拶」の名で呼ばれる対人行動を定義づけ、その特性を明らかにしておきたい。

R. Jakobson の言語機能論<sup>1)</sup>に従えば、挨拶は言語の「接触機能」(phatic function)

(1) Jakobson, R. "Linguistics and Poetics," *Style in Language*, ed. T. A. Sebeok, MIT Press, 1960

に属するものとされる。この機能論で Jakobson は人間の伝達行動が成立するには、送り手、受け手、内容事物、発語、言語体系、接触の6要素が必要であるとし、各要素の相対的な働き度合によって、特定の言語機能が発揮されるという見方をとっている。「接触機能」が特徴的に発揮されるのは、出会った人間が「接触」に焦点をあわせ、発語の場づくりのために社会的なことばを交換するときである。そこで交されることばは、他の伝達構成要素が中心的な働きをする場合にくらべて、はるかに実質的内容に乏しく、いわば心理的マッサージの役をしており、そこに“phatic”と呼ばれるこの機能の特徴がある。

もちろん、“phatic”機能は世間話や無駄話などわれわれの言語生活の他の面にも認められる。それなら、挨拶を他の“phatic”機能をもつ言語行動から区別するものは何か。ここであらためて「挨拶」という行動範疇に何を含めるべきか問い直す必要がでてくる。日本語の「挨拶」という語は大別して、出会いと別れの日常的挨拶と、冠婚葬祭などに際しての特別の挨拶との二種類を含む。だがよく考えてみると、日本語がたまたまこれらを一括して「挨拶」という名を与えているために、われわれはこの分類を当然のこととして受入れ、これに従ったとらえ方をしているように思われる。

現に出会いと別れの挨拶を一語で表わすことばをもたない英語社会の挨拶研究では、両者は必ずしも同一に論じられていない。日本語の「挨拶」の対応語とされる英語の“greeting”は「歓迎」を意味し、出会いの挨拶に限定される。この意味で彼らは少なくとも言語の側から「特別の挨拶」はもとより、出会いと別れの挨拶を対にして論ずる強制を受けていない。従って C. Ferguson<sup>2)</sup>のように、“politeness formulas”として、挨拶を感謝や詫び表現など社会関係の円滑的働きをする定型と一緒に論じるものもあれば、E. Goffman<sup>3)</sup>のように出会いと別れの挨拶を、人間が社会関係維持のために行なうに“supportive rituals”の一環として扱っているものもある。しかし、これまでの英米の挨拶研究は、主として出会いの挨拶に集中している。というのも、この分野で人間の社会行動を動物との対比で究明する動物行動学の影響が強いからである。

動物の「挨拶」行動といわれるものは、至近距離に近づいた二個体間に発生する社会的緊張を解消するためにとられる一連の調整行動のことで、この行動の結果、2個体間の接近が可能となるところから比喩的に「挨拶」(greeting)行動と呼ばれている。しかし接近した動物が別れるときの行動型については、人間に一番近い霊長類においても確認されていない。勢い人間の対人行動研究においても、もっぱら出会いの挨拶行動に関心が示されることになる。

(2) Ferguson, Charles A. “The Study and Use of Politeness Formulas,” *Language in Society*, Vol. 5, No 1, April 1976

(3) Goffman, Erving. *Relations in Public : Microstudies of the Public Order*, Pelican Book, 1971

このような観点からとらえられた人間の挨拶行動は、生得的な社会調整行動の一種として、その宥和、慰撫的機能が強調され、出会った相手に対する微笑、会釈、脱帽、握手なども、本質的には動物個体間の優位劣位関係にもとづく社会的調整行動と同じという解釈をうける。

以上のように、われわれが「挨拶」と一括して呼んでいる対人行動は、必ずしも英米の研究者によって一括して扱われておらず、研究分野の関心に応じてさまざまな視点からさまざまな切り取り方がされている。筆者のように語学教育の立場から対話における行動の流れに関心をもつものにとって、挨拶は対話の開始部と終結部に規則的におきる一種の儀礼行動として関心の対象となる。そこに見る儀礼の交換を Goffman は “access ceremony”<sup>4)</sup> と呼んでいるが、その儀礼的行為のなかにその社会の基本的人間関係のあり方、対人行動の規範が示されているように思われる。従って、今回こころみた挨拶行動の研究では、出会いと別れの両方をとりあげたが、紙幅の制約上、この小論においては出会いのみを取扱うこととし、別れの挨拶行動をまた別の発表の機会にゆだねることとする。

この種の行動研究には、言語面のみならず非言語面に考察を与えるのが当然であろう。空虚な紋切り型の表現が人間関係の円滑化となり得るのも、友好的なまなざし、声の調子、態度、会釈、お辞儀、握手などの非言語的伝達手段に裏うちされてのことだからである。しかし、この点に関しては、すでに別のところ<sup>5)</sup> で部分的に扱っているので、本稿においてはふれないことを断わっておく。

### III 挨拶表現の概要

#### A 形式

対話の開始部で交換される挨拶には、大まかにいって二種類の言語形式が認められる。その一つは、一種の符帳の合図、または極端な省略表現で、意味の上からはいわゆる「非命題的」(non-propositional) とされる表現である。日本語の「今日わ」、英語の “hello” などがこの範疇に属する。

もう一つは、「命題的」(propositional) な表現で、型通りとはいえ、社会関係の円滑化に役立つような意味内容を一応備えたものである。この種の挨拶の例としては、日本語の「しばらくでしたね」や、英語の “How nice to see you again.” などがあげられる。便宜的に第一の種類を挨拶の「定型」(formula)、第二の種類を適切な名称がないまま「準定型」<sup>6)</sup> と呼ぶことにする。

(4) 上記の著書で Goffman は、対人関係で重要な意味をもつのは相手との接触度で、出会いの挨拶は増大する接触にむけ、別れの挨拶は減少する接触にむけ、それぞれ接触度の変化に対応する調整行動であるという見方をし、これを ‘access ceremony’ と呼んでいる。

(5) 小林祐子『身ぶり言語の日英比較』エレック選書 1975

ある表現を挨拶と認めるか否かは、一般に「きまり文句」としての安定性が基準とされる。しかし、安定性の判断はいささか不安定で、個人差がある。たとえば思いがけない人に出あったときの「これは珍しい」や“Fancy meeting you here.”を挨拶と認めるかどうかについて、必ずしも意見の一致は見られないだろう。

その上、いわゆる「きまり文句」だけでいけば、日本人ばかりが挨拶のヴォキャブラリーが豊富で、アメリカ人は貧相この上もないということにもなりかねない。挨拶表現の型にも文化ごとの違いがある。「きまり文句」の交換である種の帰属感を確認する文化と、個性味を盛りこんだ表現の交換で個としての存在を認め合う文化とでは、「きまり文句」の重要性も自ずと異なってくる。従って、何を挨拶表現と認めるかは、単に慣用句としての安定性ばかりか、対話構造における位置とその機能を考慮に入れることとする。

## B 内容

挨拶は意味的内容に乏しいが、見方によっては、社会の共同関心事を示唆するものとして、興味ある面をもっている。日米各々の社会にどんな意味内容をもった挨拶が見られるかについては、「定型」「準定型」の各々にわけて記述する際に具体的に論ずるとして、ここで全体的に特徴的違いを概略することにした。

まず「定型」において、英語の<good+時>型挨拶がすべて相手に良き時を願う祈念表現<sup>7)</sup>であるのに対し、日本語の「お早よう」「今晚わ」は事実の陳述の性格をもっている。柳田国男<sup>8)</sup>に従えば、「お早よう」は、「早く起きた」と相手の早起きを認め、その勤勉ぶりをたたえる讃辞表現を起源にするといわれる。また一説によれば、これが特殊な世界で時刻に関係なく使用されるのも、「よくおかせぎになって結構」という勤勉礼讃を起源とするからともいわれる。<sup>9)</sup>「今晚わ」に関しては、一般的には「無事一日過ごしてよい夜を迎えた」と相手の無事を祝福する表現との解釈がされる。しかし、一部の地方で用いられる方言「お晩です」については、「仕事がまだ残ろうがもう夜です」とおそくまで仕事する人へのかけ声から始まったとされ<sup>10)</sup>全体に驚くほど勤勉への関心度が高い。

この同じような関心は「準定型」においてもあらわれる。通りすがりの知人に対する挨拶「お精が出ますね」「お早いですね」「もうお出かけですか」「ご苦労さんですね」などもそ

(6) 英語ではこの種の表現を“grooming talk”と呼ぶ。霊長類が社会関係調整行動の一種として互いに「毛づくろい」(grooming)を行なうところからこの名がある。

(7) 一説には“*It is a good morning (~afternoon, etc).*”の略とも云われるが、一般には“*May you have a good morning.*”を省略した welfare-wish との見方が支配的である。

(8) 柳田国男『毎日の言葉』角川文庫 昭和39年

(9) 樋口清之『日本風俗の起源』産報ブック 1976

(10) 柳田国男 前掲書

の典型であるし、「忙しさ」を健在の象徴として結構なこととする「相変わらずお忙しいので」なども、アメリカ人の“grooming talk”にあまり登場しない日本的挨拶といえよう。

日本人と欧米人の行動様式の違いの原点を「農耕民的基層文化」と「牧畜民的基層文化」の違いに求める荒木博之<sup>11)</sup>は、勤労への関心を示す日本人特有の挨拶形態に、農耕共同作業で結ばれた集団意識の投影を見る。

共同作業体制によって養われる集団意識や相互依存の社会関係は、「お世話さまになっています」「ご厄介になっています」「よろしく願います」などの挨拶ともなって表われる。人間関係を結ぶということが相互依存関係に入ることを意味するムラの共同体制では、「何分よろしく」が当然の初対面の挨拶となっても不思議はない。出会いにおいて、「一身上のことであるあなたの好意あるはからいを期待して委ねる」という完全な依存関係の確認が、儀礼の建前の上からも求められるというところに日本の社会構造の特質がある。人間関係が今後どう発展するか未知の状態では、“I am pleased to meet you.” としかコミット出来ないとする英米人の場合と対照的である。

相互依存的人間関係ではまた、相手の期待を裏切ってはならないという規制意識が強く働き、恩恵の授受、接触の頻度、あり方に敏感となる。そのために日本人の挨拶は謝意表現に強く傾斜し、「ごぶさたしております」「先日はありがとうございました」「いつぞやはご迷惑をおかけしました」の挨拶が頻繁となり、出会いでは再会の喜びや友好的感情の表現が中心となるアメリカ人の挨拶と際立った相違を見せている。

最後にもう一つ指摘しておくべき相違は、日本人の挨拶に見られるウチ・ソトの区別であろう。誰に対しても、どのような状況でも一様に再会には“hello”（又は類似表現）を用いるアメリカ人と違って、日本人はウチ・ソトに分けた空間把握に従って、挨拶を使いわけると。家族のように半永久的に「ウチ空間」を共有するもの、あるいはその時々の場合に応じて一定の空間に共通の帰属意識を感じるもの同士が選ぶ挨拶は、「ソト空間」に属する人間用の挨拶とは異なり、日本人特有の対人関係認識法を浮き彫りにしている。

(11) 荒木博之『日本人の行動様式』講談社 現代新書 昭和48年

(12) 記述の基礎資料に使用された言語材料は次の通り。

a) アメリカ人の挨拶行動について

i) 1979年10月から1980年3月まで、筆者がロスアンジェルス滞在中にテープに収録したテレビ・ドラマ、映画48本

ii) 同期間中UCLAキャンパスで行なった観察手記

iii) 戯曲: *Yes, My Darling Daughter* (by Mark Reed); *Tea and Sympathy* (by Robert Anderson); *Come Back, Little Shiba* (by William Inge); *The Moon Is Blue* (by Hugh Herbert)

b) 日本人の挨拶行動について

i) 1979年12月、1980年7月の各々にテープに収録したテレビ・ドラマ21本

ii) 小説『山の音』(川端康成); 『千羽鶴』(川端康成); 『女の足音』(平岩弓枝); 『あした来る人』(井上靖)

#### IV 日本人とアメリカ人の挨拶行動様式

日本人とアメリカ人の挨拶行動に関して集めた言語材料<sup>12)</sup>をもとに、出会いに交換される挨拶を「定型」「準定型」別に、使用場面との関連で記述し、同時に挨拶の応待行動様式にも目をむけ、それぞれの挨拶行動の特徴を明らかにしてみたい。

##### A 「定型」

##### 1. 表現形式

|                  |             | 米                                       |                         | 日            |
|------------------|-------------|---|-------------------------|--------------|
| 使用<br>時<br>間     | 制<br>限<br>的 | 午 前                                     | good morning ('morning) | お早よう (ございます) |
|                  |             | 午 後                                     | good afternoon          | 今日わ*         |
|                  |             | 夜                                       | good evening            | 今晚わ          |
| 非<br>制<br>限<br>的 | hello, hi   | ただいま, おかえり (なさい)<br>ごめん下さい, いらっしゃい (ませ) |                         |              |
|                  | howdy, hiya | オス                                      |                         |              |

\*訪問辞としては午前中も使用される

表 1

##### 2. 使用の場面的条件

##### (a) 時間的

時間的要素としては、使用時刻の問題と再会までの時間的経過の問題の二つが挨拶行動の選択にかかわる。

(1) 使用時刻：(表 1 参照)

(2) 時間経過：出会いから出会いまでの時間経過が短い場合と長い場合とでは選ばれる挨拶行動も自ずと異なる。

英語の“good morning”は朝の第一回目の出会いに限られ、それ以後時を経ずして同じ相手に再会したときは、“hi”や“hello again”に切換えられる。職場のように一日のうち何回も同じ相手にすれ違う場合、2回目以後は軽く存在確認を目で合図するか、視線を合わさないようにするよう儀礼書はすすめている。<sup>13)</sup>

一方、遠く離れていた友人と久方振りに再会した場合、普通であれば“hi”交換の仲であっても、“hello”使用は不可欠であり、これにねんごろな“grooming talk”が附加される。この種の再会を“hi”で始めることは、相手の存在軽視の解釈を受け、人間関係を損なうことにもなりかねない。<sup>14)</sup>

(13) Post, Emily. *Etiquette* (Revised by Elizabeth L. Post), Pocket Books, 1967

(14) Goffman. *op. cit.*

日本人の場合、時間的経過による挨拶行動の違いは、「準定型」や非言語行動に主としてあらわれる。一つには、英語社会ほど「定型」の交換が、社会的接触の開始に欠かせない「義務的」要素ではなく、挨拶したばかりの相手に再会したときは、「ヤァー」「マァ」などの間投詞の使用や、微笑、会釈ですんでしまう。一方、久方ぶりの再会には、「定型」のどれも不適當で、時間の経過に見合った「準定型」が選ばれる。例外は、家の出入りに伴う挨拶「定型」——「ただいま」「お帰りなさい」「ごめん下さい」「いらっしゃい」など——であり、これらは時間経過に左右されずに久方ぶりの再会第一声として使われ得る。

#### (b) 空間的

空間的要素として、その性格と、日本人の場合ウチ・ソトの把握が選択条件として働く。

(1) 空間的性格：空間の性格が公的か私的かによって、挨拶表現が異なる。英語では<good+時>型の挨拶は原則的に公的な場<sup>15)</sup>、公的な関係（後述）に使用される。たとえば、オフィスで秘書に“good morning”の挨拶をする上司が、その同じ秘書に休日の午前中商店や公園で出会えば、“hello”を使うなど、場面による挨拶の切換えがおきる。

日本語の「定型」で公的な場で「お早よう」以外に使える挨拶はほとんどない。「今日わ」「今晚わ」は基本的には他家を訪れるときの訪問辞の性格が強い。通りで出会った友人との挨拶に使っても、職場に出入りする人との間で使わないのは、これらが私的空間用法を中心とする挨拶だからであろう。この定型が訪問辞として使われるときは、このあとに「入ることを許されたい」が省略されているといわれ、<sup>16)</sup> ご用聞き「今日わ」はまさにこの種の用法例といえよう。

なお、学校や職場など一定のメンバーが毎日出会いと別れの挨拶を繰り返し交換する環境においては、退社、下校時に出あった相手に対し、たとえその日初めての出会いであっても、別れの挨拶が屢々交換される。<sup>17)</sup> これなども場面の強制力による特異な挨拶行動といえよう。

(2) ウチ・ソト空間：日本人特有のウチ・ソト空間把握とそれに伴う対人関係把握によって、日本人の挨拶行動は著しく規制される。その結果、英米人が“hello”一

(15) Ferguson. *op. cit.*

(16) 樋口清之 前掲書

(17) これは日米に共通して見られる現象である。アメリカのキャンパスでは、クラスを終えて宿舎に戻る学生たちが、すれ違う友人に“See you.” “Take it easy.” などと声をかけあう風景が見られる。日本でも講義をおえて学校を出ようとする教師におそく登校してきた学生が「さよなら」の挨拶をしたりする。

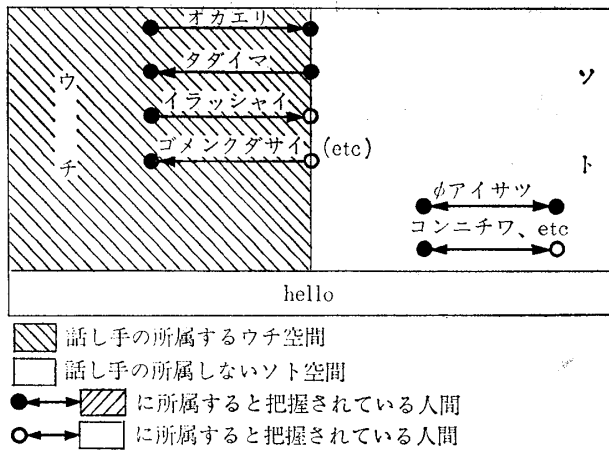


図 1

つですますところ、日本人は図 1 のように 6 通りも使いわけることになる。

(c) 参加者の社会的関係

参加者の身分・年令の上下関係、親疎の度合、性別が一般に選択条件として作用するが、日本人の場合、これにもまたウチ人間・ソト人間（前項参照）の区別が加わる。

(1) 上下親疎関係：英語の <good +

時>型の挨拶は参加者が、相手との関係を教師対学生、店員対顧客、上司対部下という役割関係でとらえるときに選ばれやすい。従って一般に考えられているように、この型の挨拶は単に時間的要素ばかりでなく、空間的性格、人間関係にも条件づけられるということになる。アメリカ人の待遇行動の調査をした R. Brown と M. Ford<sup>18)</sup>は、ある職場の朝の挨拶を例にとり、“good morning”と“hi”との使いわけにおいて、前者が上司と疎縁な同僚に、後者が部下と親しい同僚に用いられることを報告している。

英語の出会いの「定型」を「待遇表現」として、プラス（敬体）マイナス（非敬体）に分類すれば図 2 の如くなる。親しいだけの間柄に使われる“hi”と、あらた

|                  |       |          |
|------------------|-------|----------|
| -                | ○     | +        |
| hi (hiya, howdy) | hello | <good+時> |

図 2

まった間柄に使われる <good+時>の間に位置する“hello”は、「無標」<sup>19)</sup>の「普通待遇語」としての機能をもつ。

日本語の「定型」では、「今日わ」「今晚わ」が職場でほとんど使われないという事情のために、役割関係の力の落差が挨拶の使用に反映されるのは「お早よう」対「お早ようございます」のみにおいてである。<sup>20)</sup>

(18) Brown, Roger and Ford, Margaret. “Address in American English” *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol. 62, No 2, 1961

(19) “hello”が「普通待遇語」として機能するには、“acquaintanceship”という条件を必要とする。知己関係の確立していない初対面の挨拶でこれを用いれば <⊖敬体>となる。“hello”の用法に関し、前掲の Emily Post’s *Etiquette* は知己間においては “acceptable in any situations except after a formal introduction” と記している。

(20) 杉戸清樹が『言語生活』（295号, 1976）で報告している「職場での敬語」のアンケート調査では、朝の挨拶行動が調査対象に含まれており、相手の職階が上るにつれ、丁寧な挨拶を受ける率が高まるのが数字で示されている。例えば部長の「オハヨウ」と「オハヨウゴザイマス」を受ける割合は 0 対 10 であるのに対し、女事務員の場合は 6 対 4 となっている。



(2) 性別；年齢差：英語では相手との性差や年齢差が挨拶行動に影響を与えることはほとんどない。ただ話し手自身の性や年齢が表現の選択を左右する場合がある。たとえば西部方言から発達した“howdy”は主として男性に用いられるくだけた挨拶とされるし，“hiya”の使用は若年層に多い。また“passing greeting”として一番使用頻度が高い“hi”に関しても、「いい大人が使うのはみっともない」とする儀礼書<sup>21)</sup>があるところをみれば、その使用にもある程度の年齢制約があるらしい。

日本人の場合は、言うまでもなく、話し手自身の性や年齢が選択を左右すると同時に、相手との性差や年齢差も選択要因として働らく。一般に女性は男性より丁寧形を選択する傾向にあり、若い女性より年輩の女性にその傾向が強い。また他の条件が同じ場合、同性より異性に対し丁寧形が使われ、この傾向は男性から女性より、女性から男性の場合により強くあらわれる。男性にはまた、特定の集団の連帯感を示しあう挨拶「オス」があり、職場集団においてこれが使われるとき、通常年長者、女性は対象から除外される。

(3) ウチ人間対ソト人間：ウチ・ソトに区分された人間関係の把握によって日本人の挨拶行動、特にウチ人間に対する挨拶はアメリカ人とは著しく異なった型を示す。英米では基本的に家族・非家族による挨拶の区別はなく、Goffmanの言う“access ceremony”（p. 89参照）としての一貫性をもっている。すなわち、しばらく中断されていた接触再開の始めに、原則的に「定型」の交換が行われる。従って、家族間では“increased access”がはじまる起床時、帰宅時はもとより、同じ家のなかで半日顔をあわせなかったもの同士が顔をあわせるとき、街で出会うとき、友人宅で合流するとき、あらゆる接触再会に“hello”が交換される。<sup>22)</sup>

これに対し、日本人のウチ人間に対する“access ceremony”は起床時と帰宅時に限られる。これ以外の状況で、ウチ人間同士は“increased access”に対して、ソト人間に行なうような挨拶を行わない。街で母との待合わせをした娘は、アメリカ人ならば、“Hello, Mother.”と言うところを、日本人なら「ああ、お母さん」と声をかけるか、ただ「待った？」の問いかけですんでしまう。強力なウチ意識に結ばれた人

21) Wallace, Claire. *Canadian Etiquette*, ed. J. Carroll, Greywood Publishing Ltd., 1967

22) 例えば、資料の中に母の個室に用事で行っていった娘との間に次のような挨拶交換例が見られた。

娘：Mother？

母：Yes, dear.

娘：Hi.

母：Hi.

娘：I'm not disturbing you, am I？

母：Uh-uh.

(Movie : *Cash McCall*)

間間では、個が癒着し、「他人行儀」な挨拶交換を必要としないのかも知れない。

## B 「準定型」

### 1. 「準定型」の交換度

挨拶「定型」のあと、またはその代替として、しばしば「準定型」が交換される。「定型」が主として社会関係の確認、交信導通の働きをするのに対し、「準定型」は相互の心理的結びつきを強め、関係を安定・維持させる役割をする。

「定型」の使用では、主として与えられた場面的条件で、どの形式を用いるのがよいか、形式の選択が問題とされるが、「準定型」ではそれに加えて使用の度合も選択の対象となる。一定の状況で一定の相手に、どの程度挨拶をすれば満足な人間関係が維持できるかの問題である。E. Burne<sup>23)</sup>の心理学的表現をかりれば、相手の「接触」要求をみたとすのに、何回「慰撫」(strokes)を与えれば相手が満足するかであり、現実には「準定型」交換回数の問題となつてあらわれる。

知己のあいだで社会的接触が起きる状況は、大きくわけて3つある。第一に社会的関係強化を主たる目的とする接触であり、ついで社会的役割遂行上必然的に生じる接触、そして更に接触を意図しない通行上の偶然の接触である。<sup>24)</sup>この各々の異ったタイプの接触は慣習的に異った型の挨拶を要求し、日米間に相違が見られる。

たとえば、ビジネスの上での接触において、アメリカ人が機能的結びつきを重視し、情緒的「慰撫」交換を最少限にとどめるのに対し、日本人はここにも心理的結びつきを求めて“phatic communion”に時間をさく。日米間の仕事の取引で、アメリカ側が日本側の挨拶を「いつはてるとも知れない長さ」に感じたりするのも、こうした習慣の違いによる。

社会的役割の遂行から生じる接触には、この他教師と子供の親、教師と学生、医者と患者などさまざまあるが、いずれも接触の要件に入る前段階で交換される「慰撫」の度合は日本人の方が高く、表現も固定的である。

社会関係強化を目的とした社交上の接触では「慰撫」交換がまさにその全目的であり、社交技術の間われるところである。互角に社交的談笑をすることを欧米人のように社会学習しない日本人は、しばしば「型通り」の挨拶のあと、何と云うべきか苦慮することになりやすい。

通行途上の偶然の出会いでは、再会までの時間的経過(p. 92-93参照)や、一身上の変化(結婚、病気、入学、転居、就職など)が、交換度の決定要因として働らく。偶然の出会い

<sup>23)</sup> Burne, Eric. *Games People Play*, Penguin Books Ltd., 1964

<sup>24)</sup> Goffman (1971) の分類法を参考とした。

いといえ、社会的に求められる最低の交換度を遵守しなければ、心理的結びつきにひびが入るという点では、日米に相違はない。

## 2. 「準定型」の型

次の表は、資料でとらえられた三つの型の接触で、繰返し「慰撫」効果をねらって使われた表現を「準定型」として取出し、その意味内容を日米別に類型化し、使用頻度に準じて示したものである。

| (米) |                        | (日) |                        |
|-----|------------------------|-----|------------------------|
| 1   | 相手の welfare 一般に対する問いかけ | 1   | 迷惑のわび                  |
| 2   | 再会の喜び                  | 2   | 日頃(または過去)の好意に対する感謝     |
| 3   | 相手の様子に対する好意的コメント       | 3   | 相手の行動・状態に対する問いかけ       |
| 4   | 天候や身近なことに対するコメント       | 4   | 再会の喜び                  |
|     |                        | 5   | 相手の様子に対する好意的コメント       |
|     |                        | 6   | 相手の welfare 一般に対する問いかけ |
|     |                        | 7   | 天候などに対するコメント           |

表 2

| 英語文例 |  | 日本語文例 |                   |
|------|--|-------|-------------------|
| 1    | How are you?                           | 1     | このあいだはどうも。        |
| 2    | Good to see you.                       | 2     | いつぞやはありがとうございました。 |
| 3    | You look terrific.                     | 3     | お出かけですか。          |
| 4    | It's a bit wet this morning, isn't it? | 4     | お久しぶり。            |
|      |  | 5     | 相かわらずお元気そうで。      |
|      |  | 6     | 皆さんお変わりありませんか。    |
|      |  | 7     | いいおしめりで。          |

表 3

### (a) 意味内容の特徴

上の表は友好表現において、項目的に日米間に完全な共通性があることを示している。と同時に日本人にはアメリカ人になく謝意表現があり、これらが相対的使用頻度において友好表現を上まわっていることを示している。ここにもっとも端的に日米間の対人関係のあり方の違いが反映されている。

しばしば言われることだが、相手の好意に対する日本人の感情は“Thank you.”という「謝意」と同時に、“I'm sorry.”という「謝意」でもある。「謝意」という日本語が一つで「感謝」と「謝罪」の異なった意味を表わすという言語事実そのものに日本人の人間関係の特性がよく示されている。日本人の人間関係には、相手の好意を喜んで受けるだけでは「すまない」と感じさせる要素がある。自分に好意を示すために蒙ったであろう相手の負担に心がゆく。というのも、日本人の人間関係が個人の選択よりも、選択以前の「場」の共通性によ

って結ばれる傾向にあるからといえよう。中根千枝<sup>25)</sup>の言う「タテ社会」はこうした人間関係の結び方を基盤としており、このような結び方を促す要因が、荒木博之のいう日本の「農耕民的基層文化」に内在していたのかも知れない(p. 91)。

日本人が出会いの初めに、これまで相手から示された好意に言及するのも、欧米人のように好意が相手の意志によって選択的に与えられた、「単発的」イベントとして受けとれないからだろう。人間関係に付随する立場上与えられたものと受けとめる限り、謝意表現は出会いの挨拶の人間関係確認の一環として欠かせない要素となるのも当然といえる。

#### (b) 表現形式の特徴

日本人の出会いの挨拶は、単に謝意表現重視をいう点で特色があるばかりでなく、その表現法が「非個別的」という点でも、アメリカ人の挨拶法と異なる。「いろいろお世話さまになりました」「いろいろご厄介をおかけしまして」「先日はありがとうございました」という表現には、どんな世話、どんな厄介、どんな好意かは示されていない。この点、特定の相手に、特定の事柄を選んで、個人的な気持ちを伝えて、心の結びつきを求めるアメリカ人の対人行動と際立った違いを見せている。

日本のような社会構造では、社会的役割も比較的固定化している。固定化していれば慣習通り折目正しく規定通りの挨拶をすることが社会関係の維持に重要であって、「何を言うか」はさして問題にならない。しかし、人間関係の結び方が選択的で、社会的役割も流動的なアメリカでは、それぞれの相手に応じた個別的アプローチが求められ、挨拶表現も個人的、具体的要素をより多く含むこととなる。<sup>26)</sup>

### C. 挨拶の応待様式

これまでに出会いに際して交換される挨拶を「定型」「準定型」にわけて考察してきた。次にこれらがどのような形で交換されるか、挨拶行動のなかの応待様式を中心にみてみたい。

25) 中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社 現代新書 昭和42年

26) 異文化間の相互理解に必要な基礎資料として大阪府科学教育センターが行なった日本人の生活行動様式に対する在日外国人の意識調査 (*Mutual Understanding of Different Cultures*, Educational Science Institute of Osaka Prefecture, 1978) のなかで、挨拶習慣の違いがとりあげられている。質問項目の一つは、「主人がいつもお世話になりました」(Thank you very much for your many kindnesses to my husband.)という夫の上役に対する妻の挨拶をどう思うかと尋ねており、英米人の回答者全員(66名)がこれに否定的反応を示している。この種の礼を妻が夫の代弁者として言う習慣がないという理由の他に、実際に親切を受けたなら、それを具体的に言うべき(例: My husband was really grateful for your help last week.)であり、何らかの形で上役に対する主人の気持ちを伝えたいなら、特定のポイントを選んでのべるべき(例: My husband really admires your decision-making ability.)だと答えている。しかし、このような夫の役割関係に介入するような発言をするより、その外に立つ全く個人的な立場から大事な夫を早く帰してくれ(“Don't work my husband too hard.”)といった冗談をのべて、友好関係を結ぶ方をよしとする傾向が見られる。

1. 挨拶のきっかけ

一定の社会的関係にある2人の人間の間に対話事態がおこるとき、通常図3のような流れ図に従って行動するといわれる。<sup>27)</sup> 相互の存在認知が確立した時点で、どちらが先に挨拶をするかは、待遇行動としてみた場合、関心のあるところである。屢々動物の「挨拶行動」

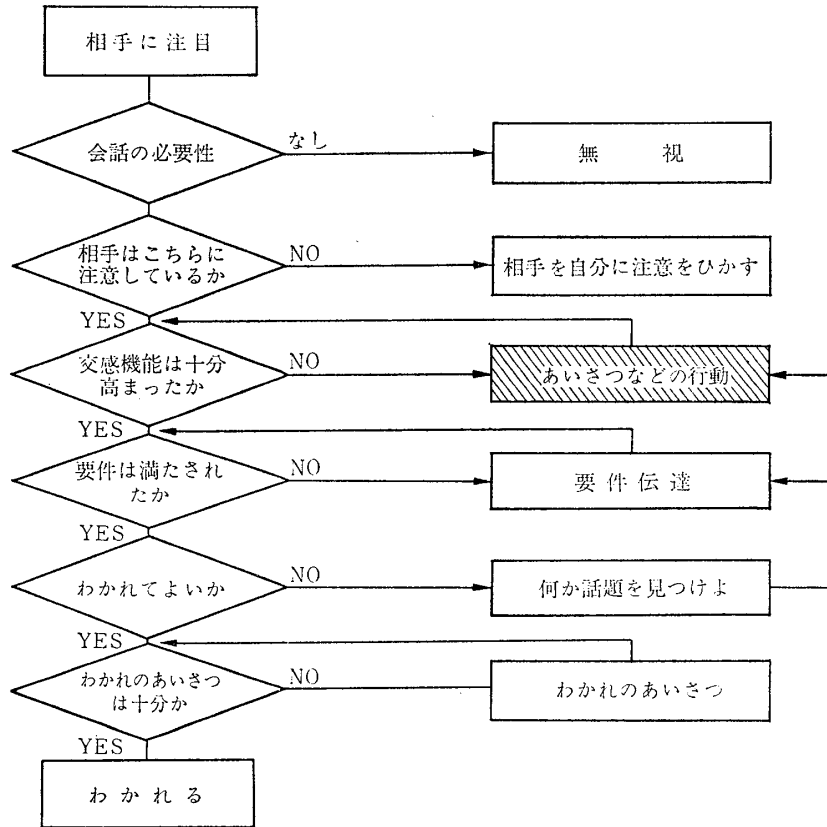


図 3

との対比で、人間も社会的に弱いものが先に挨拶をし、強いものがこれに応答するといわれる。しかし、霊長類でも、優位者が必ずしも威嚇を示すわけではなく、劣位者に対し安心感を与える慰撫的行動をすすんでとることも認められている。人間の挨拶行動においてもこの両側面が見られる。たしかに、軍隊のように歴然とした階級別にもとづく行動規準が明文文化されている社会では、デモクラシーの国といわれるアメリカにおいても、下位者が上位者に先に敬礼し、上位者の答礼がおわるまでこの姿勢を崩してはならないとされている。<sup>28)</sup> しかし、一般の社会的接触では、日本でもアメリカでも、どちらが先に声をかけるかについて、優位劣位による明確な規制はない。<sup>29)</sup> 双方の視線が出会い(図3参照)、呼吸があったところで、どちらか一方がイニシアティブをとっている。儀礼上問題になるのは、前もって膳立てをされた会合などきわめて特殊な場合に限られる。欧米の形式を重んじる会合の場

<sup>27)</sup> 堀啓造「対話モデルの構築に向かって」『対話構造の言語心理学的モデルの開発—昭和53・54年度文部省科学研究・特定研究報告書』(代表者大内茂男)

<sup>28)</sup> Goffman (1971) *op. cit.*

<sup>29)</sup> 日本人については、前掲の杉戸清樹の「職場での敬語」調査で、朝の挨拶の「あとさき」に職階別差異がほとんど認められず、どの職階に対しても「こちらから先に」挨拶すると答えたものが圧倒的に多いことが報告されている。

合、原則として挨拶を先に行なうのは上位者とされている。<sup>30)</sup>しかし、女性の保護を紳士第一の義務とする古い伝統的な西欧のしきたりでは、女性に挨拶の選択権をゆだねている。男性との交際が知られて傷つくのは女性であるという配慮から、男性は女性が公にその社会的存在を認めて挨拶を行なうまで待つのが礼儀ということらしい。<sup>31)</sup>しかし、今日ではこのような慣習はもはや守られていない。

日本で伝統的にどのような挨拶順が儀礼上守られていたか明確ではない。最近の礼法の書でもこの点に関してほとんど言及していない。ただ、名刺の交換では目下から目上に差出すべきだが挨拶では「経験豊かな目上の人から」先に声をかけるのがよいとする指摘も見られる。<sup>32)</sup>接触の緊張をほぐすには、優位者がすすんで「慰撫行動」をとるのが望ましいということなのだろう。

集めた資料では、日米共に職場のルーティン化された朝の挨拶に、幾分下位者先行の傾向があらわれているほかは、一般には他の場面的要素が同時に働いて優位劣位は挨拶順位の決定要素になっていない。

## 2. 「呼称」の使用

出会ったもの同士は、相手を固定すると同時に、社会的役割関係に適した挨拶行動をとって、相互に力関係をも確認する。その重要な指標の一つが呼称である。英語には日本語のように形態論的に整った敬語体系がない。それだけ呼称は重要な人間関係調節手段であり、対話中頻繁に使用される。挨拶においては、ほとんどかかせない要素として、挨拶「定型」のあとに付されるのが普通である。<sup>33)</sup>アメリカ人の呼称選択行動については幾つかの研究<sup>34)</sup>

(30) Firth, Raymond. "Verbal and Bodily Rituals of Greeting and Parting," *Interpretation of Ritual*, ed. J. S. La Fontaine, Tavistock, 1972. 同論文で Firth は同時に今日の欧米社会の日常的挨拶に、交換順位が見られないものべている。

(31) Goffman, Erving. *Behavior in Public Places—Notes on the Social Organization of Gatherings*, Free Press, 1963

(32) 小笠原清信『エチケットの心』広池学園事業 昭和46年

(33) 英語と日本語の挨拶のなかの呼称使用例

| 米                       | 日                  |
|-------------------------|--------------------|
| A. Good morning, Mike.  | A: 編集長, お早ようございます。 |
| B. Good morning, Frank. | B: お早よう。           |

(34) Brown, R. & Ford, M. (*op. cit.*); Ervin-Tripp, S. "On Sociolinguistic Rules: Alternation and Co-occurrence," eds. Gumperz & D. Hymes. *Directions in Sociolinguistics*, Holt, Rinehard and Winston, Inc. 1972; McIntire, M. "Terms of Address in an Academic Setting," *Anthropological Linguistics*, Vol. 14, No. 7, 1972; Schneider, David and Homans, George. "Kinship Terminology and the American Kinship System," *American Anthropologist*, 57, 1955

がなされているのでここでは、上下・親疎の関係に応じて、〈⊕敬称一姓〉〈⊖敬称一名〉が選択されることだけを記しておく。

日本人の場合、アメリカ人ほど規則的に挨拶表現に呼称を併用することはない。しかし、対話中ほとんど呼称を使用しないことにくらべれば、挨拶交換時の使用率はかなり高いといえるべきだろう。その際の呼称選択規則に関しては鈴木孝夫<sup>35)</sup>のすぐれた研究があるので、ここでは繰返しを避ける。

### 3. 挨拶のやりとり

知人間の社会的接触で一方が挨拶を行えば、他方はこれになんらかの形で応答するのが普通であり、〈挨拶〉→〈挨拶〉がそのもっとも典型的な応待様式となる。この応待の基本型が場面的条件によってどのような修正を受けるか、言語資料を参考に、アメリカ人、日本人、それぞれがかわす挨拶の第一連鎖の型を比べてみたい。

#### (a) アメリカ人

##### (1) 「定型」の使用度

アメリカ人が社会接触で発する最初のことは、“Hello.” か “Excuse me.” のどちらかだといわれる。前者は知人、後者は未知の人に働きかけることばである。英語の “hello” は、基本的に社会関係認知の合図であり、従って面識のある人との出会いは、すべて原則的に “hello” 又はその交替の「定型」連鎖で始まる。

ここで指摘しておく必要があるのは「準定型」に分類した “how-are-you” (HAY) の働きの特殊性であろう。図4に示す如く HAY は「定型」に近い規則性をもって対話の開始部に位置をしめ、屢々「定型」の代替に用いられる。<sup>36)</sup>

「命題的」には、相手の心身の健康状態に関する問いかけとされながら、応答は現実のいかにかわらず、“Fine, thanks.” と固定されていて、文字通りの意味から離れてしまっている点では「定型」とかわらない。このため HAY は表層構造では疑問文であっても、深層構造では “hello” と等価

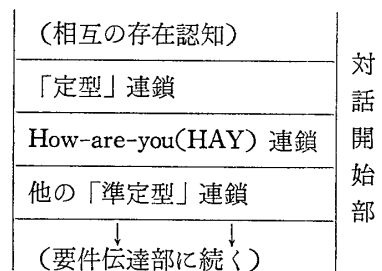


図 4

の挨拶と解釈するのが妥当であり、その応答も HAY に対する選択の余地のない挨拶定型と

35) 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書 1973

36) HAYの「定型」代替としての使用例。

a) 通りすがりの挨拶

A : *How are you, Ted?*

B : *Oh hi.*

(TV Drama : *Hayburners*)

b) 一般の挨拶

A : *Jane!*

B : *How are you, Millie dear?*

(Movie: *Jane*)

解釈の方がよいという見方さえある。<sup>37)</sup> HAY のこの特殊な用法は構造的に把握しにくく、外国人がしばしば間違いをおかすところである。<sup>38)</sup>

収集した資料に記録されたアメリカ人の出会い 178 例を、挨拶第一連鎖の型別に分類したのが次頁の表 4<sup>39)</sup>である。HAY を「定型」として扱うと、62% が <ⓐ挨拶> → <ⓐ挨拶> の

37) Goffman, Erving. "Replies and Responses—Conversational Dialogue," *Language in Society*, Vol. 5, No. 3, Dec. 1976

38) Firth R. (*op. cit.*) は外国人が HAY を文字通りの意味に解して、しばしば「健康報告」として興味深げに報告している。他方、水谷修（「英語国民の見た日本語」『翻訳の世界』1979年9月号）は、日本人がたまにしか会わない相手や、健康上気遣われる相手に選択的に使う「いかがですか」をアメリカの学生が氏に毎朝会うたびに連発するのべ、外国語の挨拶使用規則を身につけることのむずかしさを指摘している。

39) アメリカ人の挨拶第一連鎖の各型例文

|   | 型                     | 例文   | 出所                                   |
|---|-----------------------|--|--------------------------------------|
| 1 | <ⓐ挨拶> →<br><ⓐ挨拶>      | (帰宅した夫から妻に)<br>A : Oh hi, honey.<br>B : Hi, there.   | TV Drama<br><i>I Love Lucy</i>       |
| 2 | <ⓐ挨拶> →<br><∅挨拶>      | a. 非友好的<br>(青年から機嫌を悪くしている女友達へ)<br>A : Well, hello.<br>B : (silence)<br>A : I've looked over everywhere for you....                       | Movie<br><i>Cash McCall</i>          |
|   |                       | b. 友好的<br>(病院の夜勤をおえて帰宅した妻から夫へ)<br>A : Hi, honey.<br>B : Well, who's that stranger?<br>A : Sorry I'm late.                                | TV Drama<br><i>Days of our Lives</i> |
| 3 | <呼称> →<br><(呼)ⓐ(準)挨拶> | (Herbから旧友の Bill へ)<br>A : Bill!<br>B : Hello, Herb, I was just up seeing Tom.  | Play<br><i>Tea &amp; Sympathy</i>    |
| 4 | ∅                     | (ある問題で対立している父親から娘ムコへ)<br>A : You know why I'm here.<br>B : I think I do.<br>A : I don't want Julie upset anymore than you do. Jordan.... | TV Drama<br><i>Days of our Lives</i> |
| 5 | <ⓐ-ⓑ挨拶> →<br><ⓑ応答>    | (実業家からその友人の息子へ)<br>A : Hi, Ben. What are you doing with yourself these days?<br>B : Oh, not much. Taking it easy.                        | Movie<br><i>The Graduate</i>         |
| 6 | <ⓐ挨拶> →<br><ⓐ挨拶>      | (教師から学生へ)<br>A : You going to class, Al?<br>B : Hello, Mr. Reynolds. Yes, I am.  | Play<br><i>Tea &amp; Sympathy</i>    |



型を示し、挨拶交換のない8%の例を除けば、「話しかけ」か「応答」のどちらか一方に必ず「定型」の使用が見られる。

(2) 応答の型

i) 定型に対する応答

英語の「定型」使用は総じて相互的で、力関係による非相互的な使われ方は、公的な場面での〈good+時〉の交換に見られる程度 (IV-A-2-(c)-(1) p. 94) で

ある。しかも、親疎上下関係を敏感に反映する〈good+時〉は、“good morning”を除いて、その使用は現代のアメリカ社会では非常に限られたものとなり、挨拶交互の相互性をたかめている。

ヨーロッパ諸語の2人称代名詞T(⊖敬体)とV(⊕敬体)の用法の変化を研究したBrownとGilman<sup>40)</sup>は、「力」(power)と「連帯」(solidarity)の二つの原理でその使いわけを説明づけ、過去に支配的であった「力」の原理が、「連帯」の原理にとってかわられつつあることを指摘している。同じことはアメリカ人の「定型」使用についてもいえるように思われる。

「力」の原理の支配下では、下位者は上位者に〈⊕敬体〉を、上位者は下位者に〈⊖敬体〉を用いて、言語関係が非相互的なのが特徴的である。事実、先のBrown-Ford (p. 94)の論文では、“hi”と声をかけられた従業員が自動的に“hi”と応答して、相手が上司であると気付くや“good morning”と言い直したという具体例が挙げられている。しかし、目下に対する〈⊖敬体〉は、相手を連帯感の対象範囲に含めた親愛感を示すことにもなっており、〈⊕敬体〉を用いる方がむしろ「隔絶的」な人間関係を示す場合がある。古いしきたりの大学で教授が学生に用いる〈⊕敬体〉の挨拶などはその例で、未熟な学生を「学問仲間」としては扱えぬ一線を明示したものとさえいえる。その他、高級店の店員と顧客、召使と主家への訪問客との<sup>41)</sup>挨拶などでも、上位者が下位者の〈⊕敬体〉にそのまま応じることがしばしばあり、その相互的交換にかえて、隔絶した社会的・心理的距離がうちだされることにもなっている。

| (米) 挨拶第一連鎖の型 |                  | 使用率 |
|--------------|------------------|-----|
| 1            | <⊕挨拶>→<⊕挨拶>      | 62% |
| 2            | <⊕挨拶>→<∅挨拶>      | 12% |
| 3            | <呼称>→<(呼)⊕(準)挨拶> | 11% |
| 4            | ∅                | 8%  |
| 5            | <定-⊕挨拶>→<⊕応答>    | 5%  |
| 6            | <⊕挨拶>→<⊕挨拶>      | 2%  |

表 4

(40) Brown, R. W. & Gilman, A. “The Pronouns of Power and Solidarity,” *Style in Language*, ed. T. A. Sebeok, MIT Press, 1960

(41) 参加者に階級差のある場合の相互的挨拶交換例:

召使: *Good afternoon, Mr. Miller.*

訪問客: *Good afternoon.*

*Is Mrs. Hall in?*

召使: *She's in the studio, sir.*

Movie: *Where Love Has Gone*

ii) HAY に対する応答

HAY に対する応答として慣習的に固定された “Fine, thanks.” (その類似の表現) は、待遇表現として「無標」とされる。これに対し、状況に応じた “terrific” や “awful” などの「型破り」の応答は <⊖敬体> で、親密な人間関係に限っておき得る。<sup>42)</sup> これが <⊖敬体> とされるのは、儀礼的な挨拶の型を破って、自己本位の話を持出し、相手をそのことについて問わざるを得ない (What’s happened? What’s the matter? etc.) 立場に追込まれらとされる。この種の非礼に対する規制意識が一般に強いために、相手の健康状態を実際に気遣うときは、異った問いかけ法を講じる必要があるときえいわれる。<sup>43)</sup>

HAY の交換が真に相互的であるためには、<HAY>→<応答>+<HAY>→<応答> の連鎖を参加者間で往復させなければならない。このような往復は、“grooming talk” が可能な状況においてのみおこり、通りがかりのせわしない挨拶交換では <HAY>→<応答> の交換でおわることが多い。この種の非交換性が “social offence” にならないのは、HAY 連鎖が通常 <⊕挨拶>→<⊕挨拶> として解釈されるためである。<sup>44)</sup>

なお HAY のあらたまった形式とされる “How do you do?” は、今日では専ら初対面用の挨拶となり、ことさら対人距離をとる必要のある相手、場面でなければ再会の挨拶としては用いられない。これに対する応答も儀礼的に “How do you do?” と固定されている。

iii) 「呼びかけ」に対する応答

出会いの場面では相手の存在を認めた驚きや喜びから呼びかけがなされることもある。この場合、呼びかえしか、または “Oh, hello.” などの定型使用が標準的な応答法とされる。しかし相手 (男性) が誰か十分に認め難いとき、女性は “Yes?” を用い、相手の存在を認める “hello” で受けてはならないといわれる。

(42) HAY に対するくだけた応答例:

Bob: Hi, Larry. How are you?  
Larry: Lousy.  
Bob: What’s the matter?

TV Drama: *Rhoda*

(43) この点に関し Susan Ervin-Tripp (“Speech Acts and Social Learning” *Meaning in Anthropology*, eds. Basso, K. H. & Selby, H. A., University of New Mexico Press, 1976) は、HAY を挨拶にとるという根強い慣習的解釈法に逆って、健康状態に関する疑問文として受取らせるには、“How are you anyway?” といい直したり、“I heard you were sick. How are you feeling?” とたずねる必要があると指摘している。

(44) Goffman (1976) は、HAY が対話開始部の定位置におきたとき、文字通りの意味を失い、応答も独立した挨拶として受けとめられることを指摘すると同時に、“passing greeting” としては、A: “How are you?” (=Hello) B: “How are you?” (=Hello) の挨拶交換もあり得るとしている。しかし、儀礼書 (*Canadian Etiquette op. cit.*) では、この慣習を歓迎せず、HAY には “Very well, thank you.” の応答が必要で、この点 “How do you do?” と異なると注意を喚起している。

#### iv) 応答回避

<挨拶>→<挨拶>の基本的な応待パターンは友好的人間関係維持のためにどの社会でも守られている。ただこれを固守すべしとする社会的圧力には多少の違いがある。一般に「水くさい挨拶ぬきの仲」を認める日本と違って、家族間の接触にさえ最少限度の“access ceremony”を求めるアメリカでは、挨拶の交換性遵守への規制意識が強い。

日本では長い間会わなかった父子の間でも、「お父さん」「ああお前か、いつ着いたのか」といった挨拶ぬきの応答で、しっとりした接触再会が可能である。しかし、英語で“*Oh, it's you. When did you get back?*”とやれば、息子の感情は甚だしく傷つけられるだろう。

挨拶の交換が“*minimum civility*”として強く求められている以上、その不履行はそれなりの社会的意味をもつ。日本の場合よりはるかに不調和な人間関係、反発、不機嫌を意味する度合いが高い。<sup>45)</sup> この種のやりとりは特に遠慮のいらぬ間で、相手の挨拶に「けち」をつけたり、「からむ」形でおこなわれ、<sup>46)</sup> 時には連帯感に結ばれたものだけに可能な、“*mock annoyance*”の表現にも使われている。

以上のようにアメリカ人の挨拶行動の開始部を眺めてみると、「定型」の使用頻度の高さが大きな特徴として浮かび上がってくる。挨拶という社会関係確認の象徴的行動に「定型」の使用が決定的な意味をもつというこの特徴は、「準定型」にも大巾な社会関係確認の機能をもたせている日本人の挨拶行動と異なるところである。

#### (45) 挨拶に対する不機嫌な応答例：

(「騒音源」となっているアパートの住人の挨拶を無視し、苦情を申立てる管理人)

A : Hello !

B : What the hell are you making so much noise for ?

TV Drama: *Mary Tyler Moore*

#### (46) 相手の「挨拶」にからんで見せる不機嫌な応答例：

a. (部下の遅刻に厭味を云う上司)

A : Good morning.

B : *Used to be.* You've decided to show up, huh ?

TV Drama: *Shirley*

b. (気に入らない相手に対するあげ足)

A : Hi, Frankie. How are you ?

B : Compared to what ?

TV Drama: *Hayburners*

c. (遠慮のいらぬ相手へのやつあたり)

A : Good morning, everybody !

B : What's good about it ?

A : It's a beautiful day.

B : Stinks.

TV Drama: *Bob Newhart*

|   | (日) 挨拶第一連鎖の型   | 使用率 |
|---|----------------|-----|
| 1 | <㊦挨拶>→<㊦挨拶>    | 25% |
| 2 | <㊦挨拶>→<㊦応答>    | 24% |
| 3 | <㊦挨拶>→<∅挨拶>    | 18% |
| 4 | <間投詞/呼称>→<㊦挨拶> | 13% |
| 5 | ∅              | 10% |
| 6 | <間投詞/呼称>→<∅挨拶> | 6%  |
| 7 | <間投詞/呼称>→<㊦挨拶> | 4%  |

表 5

の場合とかなり異なったものとなる。左の表は収集した日本人の出会いの挨拶例 136 の第一連鎖の型を示したものである。<sup>47)</sup> これによると、アメリカ人の出会いの挨拶で92%を占めた「定型」の使用率は、日本人の場合、47%と半分以下にとどまっている。記録された「定型」で

(b) 日本人

(1) 「定型」の使用度

日本語の「定型」には、人間関係のいかんにかかわらず、いつ、どこで、誰にあっても使える“hello”のような相互に交換的な挨拶表現がない。また社会的接触に「定型」交換がアメリカの場合ほど不可欠な要素でもない。従って、日本人の挨拶における「定型」の使用度は、アメリカ人の

47) 日本人の挨拶の第一連鎖各型の例文

|   | 型                  | 例文  | 出所                   |
|---|--------------------|---|----------------------|
| 1 | <㊦挨拶>→<br><㊦挨拶>    | (帰宅した息子から母親へ)<br>A: 只今。<br>B: お帰りなさい。   | TVドラマ<br>『旅立ちは愛か』    |
| 2 | <㊦挨拶>→<br><㊦応答>    | (中年の勤め人から隣家の女医へ)<br>A: 往診ですか。<br>B: ハァー。  | TVドラマ<br>『ご近所の星』     |
| 3 | <㊦挨拶>→∅            | (妻から帰宅した夫へ)<br>A: お帰りなさい。<br>B: 宏は?   | TVドラマ<br>『旅立ちは愛か』    |
| 4 | <間投詞/呼称>→<br><㊦挨拶> | (雑誌編集長から若い知合の女性へ)<br>A: イョー。<br>B: お呼びたてしてすみません。  | TVドラマ<br>『オレンジ色の愛たち』 |
| 5 | ∅                  | (兄から自室に尋ねて来た妹へ)<br>A: 何か用か。<br>B: うん、ネェー、今日流山でお父さんに会ったんだって?<br>A: ああ、何だってあんなところにいったのかナ親父。 | TVドラマ<br>『ご近所の星』     |
| 6 | <間投詞/呼称>→<br><∅挨拶> | (レストランで偶然出あった妹から兄へ)<br>A: あら兄さん。<br>B: 何だ、ミエ子か。   | TVドラマ<br>『女のそろばん』    |
| 7 | <間投詞/呼称>→<br><㊦挨拶> | (主婦から近所の青年へ)<br>A: まあ伊能さん。<br>B: 今晚わ。夜分すみません。   | TVドラマ<br>『旅立ちは愛か』    |

使用頻度が比較的高いのは、「お早よう（ございます）」と、家の出入りのときの挨拶「只今」「お帰り」「いらっしゃい」の4つで、これらの「定型」全体に対する使用率は8割をこす。この資料で見ると、日本人が午後に家の外で人に会ったときにかわす最初のことは、場面的条件に左右される要素が強く、「ヤァー、どうも」といったあいまいな表現の使用を促す結果を招いているのかも知れない。

### (2) 「準定型」の使用度

アメリカ人の挨拶では、“How are you doing?” “How nice to see you.”などの限られた種類の「準定型」が第一連鎖に使用されるのみで、その使用率は僅か7%（HAYは除外）に過ぎない。これに対し、日本語では、先に示した「準定型」の文例表（IV-B-2, p.97）の例文がそのままどれも第一連鎖に使えるほど、接触冒頭での使用度が高く37%にも達している。

第一連鎖にあらわれる「準定型」のうち、「謝意表現」の日本的特徴について先にふれた（IV-B-2-(a), p.97-98）が、これにつぐ頻度をもってあらわれるのが「相手の行動・状態に対する問いかけ」である。これは日本人がたとえば玄関先をはく隣家の主婦をみて「お掃除ですか」などと問わずもがなの自明のことをたずねて、友好的関係を表示する挨拶で、通行途上の挨拶として肩の凝らない相手によく用いられるものである。アメリカ人もこの種の「無意味」な問いを対話の「場づくり」に使いはするが、<sup>48)</sup> 第一連鎖に使用する例（脚註39（6））は限られている。

知人との接触を原則として「定型」で始めるように習慣づけられている英米人にとって、第一連鎖におきるこの種の疑問文を、HAYと大差ない挨拶表現として受けとめることはむずかしいらしい。「どちらまで」や「お出かけですか」などという日本人の挨拶が、無難で、詮索好きと解されやすいのもこのためである。<sup>49)</sup>

### (3) 間投詞・呼称の使用度

アメリカ人は対話中発話の区切り区切りで繰り返し相手の呼称を使用する。挨拶でも呼称

(48) Goffman (1971) は、この種の問いかけを一種の“rhetorical question”と呼び、アメリカでは関係維持のためより、接触開始の許可を求める手段として使われるとし、例えば湖水から出てきた男に口をきくきっかけとして、“Been in swimming?” などという例をあげている。

(49) 筆者のイギリスの友人（女性）は、イギリスの主婦なら「どちらまで」にあたる状況でおそらく次のように表現を整えて挨拶とするだろうとのべている。

Good morning, Mrs. (Neighbour) !

You do look very nice.

I hope you're going somewhere special.

(または Are you going somewhere special?)

上記の挨拶内容は日本語では「なれなれしく」響いて、かなり相手を選ばなければ使えないように思われる。

後置のこの習慣がそのまま持ちこされ、前置の率は相対的に低くなっている。日本人の場合、対話中に呼称の使用習慣がない。しかし、接触を呼びかけで始める習慣はあり、第一連鎖に比較的高い頻度で起きている(脚註47(6,7)参照)。

呼称と同時に、或いは単独で、間投詞が挨拶がわりに用いられるのも、日本人に特徴的な挨拶行動といえよう。アメリカ人の“oh”一種に対し、日本人には「ヤァー」「イヤァー」「ヨォー」「マァー」「アラ」など種類も多く、話者の性別や、出会い、及び出会いの相手に対する感情の違いがこれによって示されている。

#### (4) 応答の型

日本語の「定型」で交換的に用いられるのは、「お早よう」「今日わ」「今晚わ」「オス」で、家に入出りの挨拶は迎えるものと迎えられるものとで挨拶が異なるし、「今日わ」「今晚わ」も訪問辞として用いられるときは屢々交換性を失う。公的空間で用いられる唯一の「定型」「おはよう」については、すでに「力」の原理や性別・年齢などがその使用を支配することを指摘した(IV-A-2-(c)-(1), (2) p. 94-95)。

「準定型」については、その応答が慣習的に固定されたものが多い。「どちらまで」には「一寸そこまで」、「お元気ですか」には「おかげさまで」、「お世話さまになりまして」には「いえ、こちらこそ」と、実質的情報交換としては、なんら意味をもたず、その点で英語のHAYに対する“Fine, thanks.”の応答に共通するところがある。ただ英米人の挨拶のなかで型通りの応答を要求するHAYが例外的であるのに対し、日本人の挨拶ではむしろそれが全体的傾向であるところに違いがある。

出会いにおいて、相手に挨拶を返さない比率は、日本人の場合、資料の上でアメリカ人より12%高くなっており、挨拶交換のない出会いも含めれば、14%高となる。それも多くの場合、非友好的人間関係から生じたものではなく、家族や遠慮のいらぬ間で日常的に起きている。<sup>50)</sup>この種の相違は、人間関係を「身内」と「他人」という形でおこなう日本人と、自己以外の存在をすべて「他者」(他人ではなく)としてとらえる欧米人との違いから生じた現象としてみる事が出来る。

#### おわりに

以上、日本人とアメリカ人の出会いの挨拶行動の大まかな鳥瞰図をそれぞれにとらえ、二枚を重ねあわせて出てくる特徴的な違いに注目し、これを説明づける要因を専ら言語の外的世界、使用場面を構成する社会のなかに求めてみた。

従来、言語の研究は言語の抽象的記号体系の研究にしばられて来た。そもそも人間の言語

<sup>50)</sup> 脚註(47) 3, 5, 6 例文参照

の本質は、音声と意味から成る有限個の形態素を自在に組合わせ、無限の文を生み出すその創造的生成力にあり、その生成力の説明づけが言語研究の中心的課題であったといえる。この点、挨拶表現は、はなはだしく言語の本質から離れた異端的存在といえよう。挨拶表現を構成する個々の形態素は固定的な組合わせのなかで本来の意味を失い、儀礼的「きまり文句」として、非創造的であることをその特徴としている。従って、挨拶表現を純粹に言語記号の世界に閉じこめて眺めれば、まことに「不毛」な言語現象といわざるを得ない。

しかし、これを実際的使用場面との関連でとらえてみると、言語行動が社会的条件によっていかに律されるものであり、この部分の考察なしに言語行動は十分にとらえられるものでないことを実証づける一つのケース・スタディとして、興味ある材料を提供してくれる。その具体例をなるべく総合的に提示しようとしたのがこの小論といえる。

単に挨拶に限らず、感謝、謝罪、依頼、釈明など、その他あらゆる人間関係調整にかかわる言語行動は、どれも場面的条件の支配を受けており、具体的な場面で具体的な表現として表われることばの意味も、それぞれの場面に働らく選択条件と対比してみなければ真の把握はむずかしい。今までの言語研究ではこうした言語の世界の外側への考察がほとんどなされておらず、言語を「言語行動」としてとらえる見方も最近になって行われはじめたばかりである。その意味で、今回の挨拶行動の研究は、社会的場面を考察の視点にとりこんだ言語行動研究のあり方を模索する一つのところみとして位置づけたいと考えている。

使用場面を考察に含めれば、その場面が一部をなす社会構造、ひいてはそれを包みこむ文化の問題も当然視点に入らざるを得ない。言語行動の比較が、社会構造の比較、文化の比較につながるゆえんであり、出会いの挨拶行動という限られた研究対象ですら十分に取扱えないほどの複雑性を招き入れることになる。そのため今回の資料分析においても、かなり恣意的に問題を限らざるを得なくなり、今後課題を多く抱えてこむ結果となった。

## 参考文献

Apte, M. L. "Thank You and South Asian Languages : a Comparative Sociolinguistic Study," *International Journal of the Sociology of Language*, 3, 1974

Basso, Keith. "To Give up on Words : Silence in Western Apache Culture," *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol. 26, No 3, 1970

Brown, R. W. and Ford, Margaret. "Address in American English," *Journal of Abnormal & Social Psychology*, Vol. 62, No 2, 1961

Brown, R. W. & Gilman, A. "The Pronouns of Power and Solidarity," *Style in Language*, ed. T. A. Sebeok, MIT Press, 1960

Callan, H. *Ethology and Society Towards an Anthropological View*, (esp. Chapter 7), Clarendon Press, 1970

Coulthard, Malcolm. *An Introduction to Discourse Analysis*, Longman, 1977

Editors of Esquire Magazine & Butler, R. *Esquire's Guide to Modern Etiquette : Manners for*

- Men on the Way to Success*, Lippincott Co., 1969
- Ervin-Tripp, S. "Speech Acts and Social Learning," *Meaning in Anthropology*, eds. Basso, K. H. & Selby, H. A., University of New Mexico Press, 1976
- . "On Sociolinguistic Rules : Alternation & Co-occurrence," eds. Gumperz & D. Hymes, *Directions in Sociolinguistics*, Holt, Rinehard & Winston, Inc., 1972
- Ferguson, C. A., "The Structure and Use of Politeness Formulas," *Language in Society*, Vol. 5, No 1, 1976
- Firth, R. "Verbal and Bodily Rituals of Greeting and Parting," *Interpretation of Ritual*, ed. J. S. La Fontaine, Tavistock, 1972
- Goffman, E. *Behavior in Public Places : Notes on the Social Organization of Gatherings*, Free Press, 1963
- . *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, Doubleday, 1967
- . *Relations in Public: Microstudies of the Public Order*, Pelican Book, 1971
- . "Replies and Responses : Conversational Dialogue," *Language in Society*, Vol. 5, No 3, 1976
- Goody, E. "'Greeting,' 'Begging,' and the Presentation of Respect," *Interpretation of Ritual*, ed. J. S. La Fontaine, Tavistock, 1972
- Gumperz, J. J. "Sociocultural Knowledge in Conversational Inference," *Georgetown University Round Table on Language and Linguistics*, Georgetown University Press, 1977
- Hymes, D., "The Ethnography of Speaking," *Readings in the Sociology of Language*, ed. J. A. Fishman, Mouton, 1968
- Jakobson, R. "Linguistics and Poetics," *Style in Language*, ed. T. A. Sebeok, MIT Press, 1960
- Kendon, A. & Ferber. A. "Description of Some Human Greetings," *Comparative Ecology and Behavior of Primates*, eds. R. Michael and J. H. Crook, Academic Press, 1973
- 国広哲彌, 「日本人の言語行動と非言語行動」大野晋・柴田武編<岩波講座・日本語2>『言語生活』岩波書店, 1977
- 久野暉「英語圏における敬語」大野晋・柴田武編<岩波講座・日本語4>『言語生活』岩波書店
- Lakoff, Robin. "Logic of Politeness: or Minding Your P's and Q's," *Papers from the Ninth Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, 1973
- 南不二男「日本語の敬語」金田一春彦編<日本語講座第一巻>『日本語の姿』大修館書店 1976
- 編『言語と行動』<講座言語第3巻>大修館書店 1979
- Morris, Desmond. *The Naked Ape*, McGraw-Hill Book, 1967
- . *Manwatching: a Field Guide to Human Behavior*, Harry N. Abrams, Inc., 1977
- Post, Emily. *Etiquette* (Revised by Elizabeth L. Post), Pocket Books, 1967
- Schegloff, Emanuel. "Sequencing in Conversational Openings," *American Anthropologist*, Vol. 70, No. 6, 1968
- Schegloff, E. & Sacks, H. "Opening up Closings," *Semiotica*, VIII, 1973
- 杉戸清樹「職場での敬語」『言語生活』No295, 1976
- 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書 1973
- . 「あいさつ論：あいさつの言語社会的考察」『ことばと社会』中公叢書 昭和50年
- 柳田国男『毎日の言葉』角川文庫 昭和39年

〔本学短期大学部教授（英語学） 1979年度 個人研究員〕